

Il pleut, ça mouille, c'est la fête à la grenouille !

— ÇA を主語とする発話について —

春木 仁孝
(大阪大学)

Il pleut.に対して Ça pleut.という表現がある。この表現は俗な表現だとか方言形だと一蹴されることもあるが、実際には用例は多い。これ以外にも Ça neige.や Ça tonne., Ça caille.など天候表現は一般に ÇA を主語に取ることができるが、非人称構文に比べると微妙な制約もあり、容認度やニュアンスの違いもある。結論を言っておけば、Ça pleut. は Il pleut.の単なる話し言葉的バリエーションではないのである。ÇA を主語に取る天候表現の中でも人称構文もあるが故に一般に受け入れられる Ça gèle.は、天候表現とそれ以外の ÇA を主語に取る表現との境界領域にあると言える。この境界領域には、Ça mouille.あるいは Ça glisse! 「すべる! / すべりやすいよ!」などの表現が存在している。さらには Ça marche!, Ça sent bon., Ça y est!, Ça va barder.のように発話の場や状況を述べる表現、Ça pique. 「ちくちくする」や Ça me gratte.のように身体感覚について述べる表現、Ça tournait encore beaucoup. 「さらに何度もカーブが続いていた」のように移動を表わす表現にとどまらず、人を主語にするのが一般的な動詞が ÇA を主語とした Mais, ça travaille ici! 「いやー、ここではみんな精が出ますね」のようにその場にいる人たちを“包み込む”表現など、ÇA を主語とする様々なタイプの表現がある。

以上のような構文における ÇA は一体どのような機能を持っているのだろうか。このような発話における ÇA は果たして何かを指示しているのだろうか。たとえば Ça glisse! 「すべる! / すべりやすいよ!」という発話において、ÇA は足や靴、それとも床や道を指しているのだろうか。本発表では ÇA を主語とする表現の特異性とその機能について認知モードの観点から考察するとともに、ÇA を主語とする発話が自動詞と他動詞をいわば中和したような、(そして非人称構文とも異なる) 別のカテゴリーを構成していることを主張する。本発表の主張を通して、ÇA が何かを指示しているのかどうかという問いに対しても、自ずと答えが出て来ることになる。(さらに時間が許せば、左方あるいは右方に遊離された要素を受けているように見える ÇA についても、新たな見方が出来るのではないかということについても触れたい。)